学界時評

中古

山本登朗

『竹取物語』の類話として「斑竹姑娘」の存在が紹介され、大きな波紋を呼んだのは昭和四七年。以後三十年を越える議論の中で、『竹取物語』を中国説話のそのままの翻案とする説は、ほぼ否定される方向で現在に至っているように思われるが、なお決定的な決着はついていない。この問題について、宋成徳「『竹取物語』、「竹公主」から「斑竹姑娘」へ」（『京都大学國文學論叢』12　九月）は、新しい視点から重要な見解を提示している。すなわち宋氏は、一九二二年（大正11）に中国で発行された児童文学誌『児童世界』に連載された、鄭振鐸による『竹取物語』の訳述「竹公主」の内容や表現が、「斑竹姑娘」に酷似するという。これによれば、「斑竹姑娘」は、『竹取物語』の訳述である「竹公主」の「再話」ということになる。『竹取物語』と「斑竹姑娘」をめぐる長い議論の中で、両者を媒介する文献が具体的に指摘されたのは今回が初めてである。さらなる検証が必要ではあるが、宋氏の論が正しければ、今後「斑竹姑娘」は『竹取物語』の享受史の中で語られることになろう。このような発見と報告が、中国から留学中の若い日本文学研究者によっておこなわれたことに、この問題発生以来の長い時の経過を感じずにはおれない。

もっとも、中国の女仙譚や東南アジアに広がる竹中生誕説話との関連の中で『竹取物語』を考える視点そのものは、依然として有効かつ必要である。後者の伝承については、最近では弘末雅士『世界史リブレット72・東南アジアの建国神話』（山川出版社　15年4月）が詳しい。

近頃世間に流行るものに「COE」というものがあり、そのためもあって、全国的に国際シンポジウムが花盛りだが、和漢比較文学会と九州大学21世紀COEプログラム「東アジアと日本・交流と変容」の共催で行われた公開シンポジウム「東アジアの中の白楽天」（11月13日）は、日本の平安朝文学にとっても重要な存在である白楽天を取り上げた、興味深い企画であった。くわしくはレジュメを見られたいが、当日は、国文学研究者からの「中国ではどうして白楽天をもっと高く評価しないのか」という質問に、中国側から「どうして日本人は白楽天をそんなに高く評価するのか」という反問が返され、親密な雰囲気の中で日中間の白楽天評価の相違があらためて浮き彫りにされるなど、内容には新鮮なものが多かった。日本人の中国文学研究者からは「白楽天は現世の快楽を味わいつくした幸せな詩人だった」という見解も示されたが、平安時代の日本人は、けっしてそのようには考えていなかったであろう。学際という語も古い流行語だが、単なるすきまではない、学と学の間のギャップに視点を置いてものを考えてみるのも、また楽しい。

安藤徹「「おのづから」の物語社会―『源氏物語』の〈うわさ〉をめぐって―」（『名古屋大学国語国文学』94　7月）は、中西宇一「副詞「おのづから」の自発性」（『中田祝夫博士功績記念国語学論集』同刊行会　昭54年1月）の分析をふまえつつ、源氏物語に多用されて

いる「おのづから」という語の意味用法を手がかりに、物語を構成する一要素としての「うわさ」について考察する。「〈おのづから〉〈うわさ〉が伝播するような社会として『源氏物語』の物語社会は構築されている」という把握は示唆に富み、今後の源氏物語研究にひとつの課題を提起している。本論の末尾は「重要なのは、どのようにして「おのづから」と言いうるのか、なぜ「おのづから」と語ることが可能なのか、その理路の解明を通じて物語社会の記述を試みることである」と締めくくられているが、続論におけるその解明に期待したい。

本廣陽子「源氏物語の文体の一特質―形容詞の語幹＋接尾語「さ」―」（『文学』7・8月号）は、これも源氏物語に多用される「形容詞の語幹＋接尾語「さ」」という語法の分析を通して源氏物語の文体の解明を試みた論。この語法については、秋本守英『仮名文章表現史の研究』（思文閣出版　平8年2月、初出は昭51・58）にすでに詳論があるが、本廣氏はそれをふまえつつ、あらためて用例の検討をおこない、あくまでも源氏物語の文体の問題として再考を試みている。「具体的な行為とそれを行った人物に対する批評という、上接する連体修飾句と「―さ」の関係」を「源氏物語で創意工夫された新しい表現形式」とする本廣氏の見解は、清水好子「物語の文体」（昭49）や渡辺実「仮名文の初期」（昭56）などで示されている認識にもつながる。周到な分析をふまえた着実な論として評価したい。

平成十七年は、古今集一一〇〇年・新古今集八〇〇年の記念の年ということで、本誌でも特集が編まれた（11月）が、和歌文学会では今年を「古今集・新古今集の年」と名付け、さまざまな催しを企画している。『和歌文学研究』88号（6月）の浅田徹「「古今集・新古今集の年」について」にはその概略が記され、同88号・89号には、すでに行われた記念企画の記録が掲載されている。その一つとして、和歌文学会の編集になる論集『古今集新古今集の方法』（笠間書院　責任編集　浅田徹・藤平泉　10月）が刊行された。十三編の論文のほか、巻末には「勅撰和歌集を読むための小辞典」が付載されている。その論集にも「古今集・新古今集の享受」という章が立てられているが、それとは別に、西田正宏「望月長孝『古今仰恋』の方法と達成」（『国語国文』73巻12　12月）は、松永貞徳の門人である望月長孝の説を記した古今集注釈書『古今仰恋』の注記の具体的分析によって、同書が、中世以来の「秘伝」を墨守するだけでなく、契沖の『古今余材抄』にも共通する数多くの新しさを有していたことを明らかにして、古今集の享受史に見直しを迫っている。

中周子「拾遺集恋部における贈答歌とその詞書」（『同志社国文学』61　11月）は、「拾遺集の詞書が巻々の構成を意識して意図的に付されている」とし、さらに「贈答歌とその詞書が、恋の配列構成を考える上で等閑視できない」ことを主張して、拾遺集の配列構成研究に新しい視点を提示するとともに、勅撰集における詞書の存在意義についても一石を投じる。

他にも好論はあるが、全般的に、三代集研究は近年いささか沈滞ぎみではないかというのが大方の認識である。記念の年をぜひとも、あらたな隆盛への転機としたいものである。―関西大学教授―

時評担当

上代　青木
〃中古　毛利正守
〃中世　山本周平
〃中世　原岡文
〃近世　徳田正朗
〃近代　渡部泰一
〃国語　飯倉洋明（次号）
近藤　小野寺和夫
〃　松本登
〃　高橋文
〃　田中博
〃　田倉康
〃　飯田洋
〃　渡部泰
〃　徳田和
〃　山本登
〃　原岡文
〃　毛利正
〃　青木周
泰氏　正氏　常氏　博史氏　康二氏　洋一氏　泰明氏　和夫氏　登朗氏　文子氏　正守氏　周平氏
弘氏　弘氏　彦氏（次号）